

原文	修正文
日本はこれらのアジア各地域に戦争への協力を求め、合わせてその結束を示すため、1943(昭和18)年11月、東京で大東亜会議を開催した。<u>この会議には、満州、中華民国(南京政府)(①)、フィリピン、タイ、ビルマの代表と、自由インド仮政府のチャンドラ・ボースが参加した。</u> 会議では、連合国の大西洋憲章に対抗して大東亜共同宣言が発せられ、各国の自主独立、相互の提携による経済発展、人種差別撤廃をうたいあげた。この会議以降、日本は、欧米勢力を排除したアジア人による「大東亜共栄圏」建設を戦争の名目としてかけろようになった。 大東亜会議に至る経緯及び大東亜共栄圏構想が出された時期について、誤解するおそれのある表現である。	日本はこれらのアジア各地域に戦争への協力を求め、合わせてその結束を示すため、1943(昭和18)年11月、東京で大東亜会議を開催した(①)。 会議では、連合国の大西洋憲章に対抗して大東亜共同宣言が発せられ、各国の自主独立、相互の提携による経済発展、人種差別撤廃をうたいあげた。この会議以降、日本は、欧米勢力を排除したアジア人による大東亜共栄圏(→p.201)の建設を、戦争の名目としてより明確にかけろようになった。 大東亜共栄圏の太字とカギをはずす)
107番の関連修正(本文の内容を側注にうつし、経過を明確にするため) 同p. 側注 ①日本は重慶の国民党政府に対抗して、南京に日本に協力的な政府をつくっていた。 同p. 下キャプション チャンドラ・ボース p.200, 220 大東亜共栄圏(→p.200)	①大東亜会議の出席国のうち、南京政府は、重慶の国民党政府に対抗してつくられた日本に協力的な政府のこと。また、1943年、日本はビルマ、フィリピンを独立させ、自由インド仮政府を承認した。 チャンドラ・ボース 自由インド仮政府の代表として大東亜会議に出席した。 大東亜共栄圏(太字に)